夕刊フジ　2019年6月15日（14日発行）

ニッポン ドクター和の 臨終図巻

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

⑲ 作家 田辺聖子

母親と重なる「絶やさぬ笑顔」

あなたの人生は、何色ですか？　と訊かれたらなんと答えますか。

今年61歳になる私は…グレーとかブルーとかで、あまり明るい色はイメージできそうにありません。

しかし、この人は、色紙に好んでこう書かれていたようです。「まいにち　ばらいろ」

毎日美しく咲いてみよう、という気持ちこそが大切だとあるインタビューで言っていました。

女流作家の作品をあまり読まずに育った私が、この人に親しみを覚えるのは、私の育った兵庫県伊丹市にお住まいで、伊丹大使を任命されていたこと。そして、田辺さんと同年代だった戦前生まれの亡き母が、この人の本を貪（むさぼ）るように読んでいたからです。

国民的小説家であった田辺聖子さんが、6月6日に神戸市内の病院で亡くなりました。享年91。4月末から体調を崩して入院されていたそうです。死因は、胆管炎とのこと。この連載で、胆管炎を取り上げるのは初めてだと思います。しかし、高齢者においては決して珍しい病態ではありません。

胆石によって胆道の流れが悪くなると、胆汁に細菌が入りやすくなり、胆のう炎や胆管炎を起こすことを時に経験します。また膵臓（すいぞう）や胆道系の腫瘍の合併症症状としての胆管炎もあります。

上腹部が痛くなるので、胃痛と間違える人も多くいるので要注意です。また画像上、胆石がない人でも胆管炎を起こす人もいます。

腹痛以外の症状としては、高熱や黄疸（おうだん）が出ることもあります。しかし高齢者の場合は、無症状のまま進行し、数日の間に急速に悪化して敗血症に至ることもあり亡くなることもあります。炎症の進展に伴い、意識が混濁したりショック状態に陥ります。

急性胆管炎の治療の基本はまず絶食と点滴、そして抗菌薬の投与です。症状が重い場合は、胆管にたまっている胆汁を、内視鏡を用いて体の外に排出させるドレナージを行うことも。

九十代まで特に大病もなく過ごされていた田辺さんですから、大往生と言ってもいいでしょう。

先日、伊丹市に50年以上住んでいた母の家に戻り遺品整理をしていると、本棚のなかに『上機嫌の才能』や『人生はだまし、だまし』など、明るくユーモラスなタイトルの田辺作品が並んでいることに目が留まりました。

〈人間の最上の徳はとは、人に対して上機嫌で接すること〉

その言葉を見つけたとき、いつもニコニコされていた田辺さんの御顔と、母の顔が重なって浮かびました。年を重ねるとともに、怒りっぽくなる人と、逆に、笑顔を絶やさずにいる人に分かれるように思います。さて自分はどっちだろう…遺書も残さず急逝した母が、田辺さんの本を通してメッセージを残してくれました。